

韓国における観光地理学研究の動向

北 田 晃 司*

I はじめに

近年、経済成長を背景とした所得や生活水準の向上により、人間活動は急速に多様化の度を強めている。特に、人間の活動を「就業や購買など生活を行うための手段としての必需的な活動」と、「より生活を豊かにするために行う選択的活動」に区分した場合、活動の多様化とは、選択的活動の人間活動全体に占める割合の上昇であると言える。

地理学においても、このことを反映して、選択的活動を扱った研究が増大してきている。中でも観光活動は、地理学において重要な研究対象である。観光活動は単に個々の人間の活動にとどまらず、資源の分布・利用や経済開発といった問題をも包含するものであり、実際に活動が行われる空間である「地域」を意識することなしに考察を加えることは極めて困難であると考えられるからである。

実際、観光地理学研究は増加してきており、今後も増加が予想される。しかし、観光のような選択的活動が人間活動全体において重要な地位を占めるようになったのは最近のことである。特に経済成長を遂げた時期が比較的新しい非欧米諸国においては、観光地理学の研究の歴史は必ずしも長いとは言えない。

しかし、各国における観光地理学のこれまでの研究動向を検討し、さらに将来の研究に対する展望や他国の研究との比較を行うことは、観光という活動自体が国民の生活水準と密接な関係があると考えられるだけに、各国の社会を理解する上で最も重要であると考えられる。

本稿では、韓国における近年の観光地理学の研究動向を検討し、今後の研究に対する展望を行う。

韓国は1960年代以降めざましい経済成長を遂げており、アジア NIES の一員にも数えられるに至っている。この点で、韓国における観光地理学の研究動向を検討することは、わが国、さらに台湾なども含めた、近年、経済成長が著しい東アジアという地域を理解する一助にもなると考えられる。

II 韓国における観光の発達及び本研究の視点

1. 韓国における観光の発達

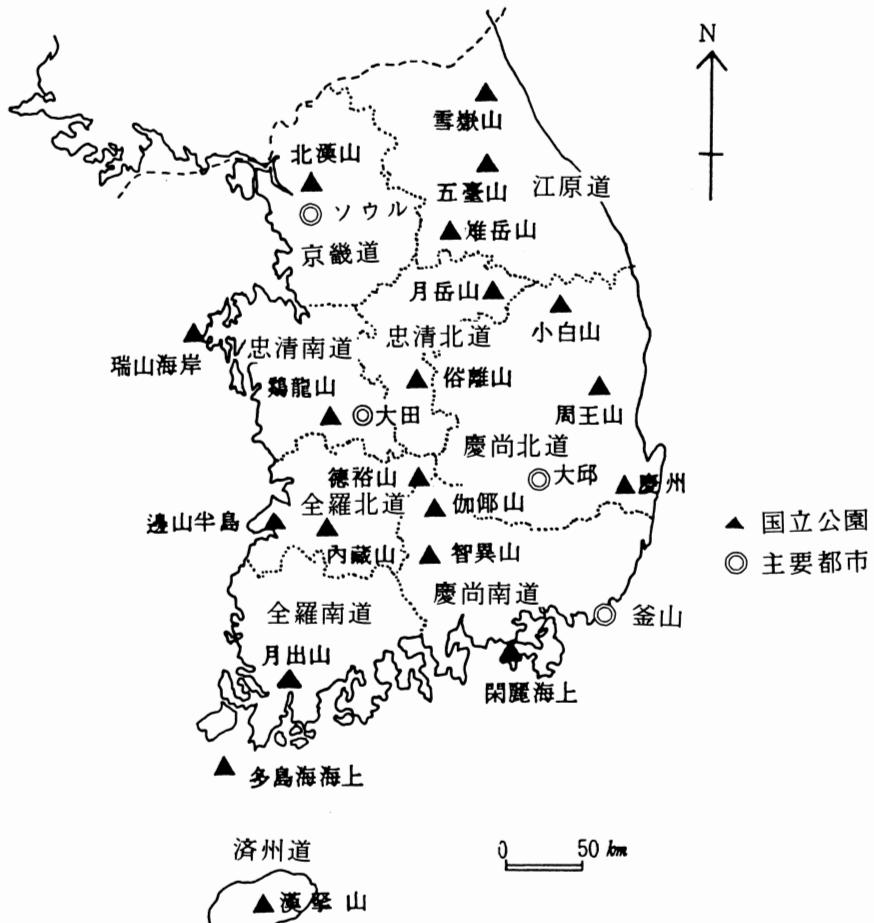
韓国における観光地理学研究の動向について述べる前に、韓国における観光の発達について概観する。

韓国において、観光が本格的な発展を開始したのは、1970年代以降である。その要因としては、1960年代以来の高度経済成長による国民所得の増大、余暇時間の拡大、さらに交通の発達、特に全国的な高速道路網の完成などが挙げられる。こうして観光は、韓国の国民生活の中に急速に普及するに至った。

また、1967年における国立公園¹⁾の指定（第1図）から現在の5大観光圏²⁾の指定にいたるまで、主に国内資源の開発という意図のもとではあるが、政府は積極的な観光政策を数次にわたって打ち出してきた。

さらにソウルオリンピック（1988年）を契機として、スポーツやレクリエーションといった選択的活動の意義がこれまで以上に重視されるようになった。また、オリンピック以降、韓国を訪問する外国人観光客が急増したことによって、観光は韓国の国民生活においてこれまで以上に重要な地位を占めるに至っている。

* 東京大学大学院



第1図 韓国における国立公園の分布

2. 本研究の視点

韓国において観光地理学研究が盛んになったのは、観光の発達と同様に1970年代以降である。このように、観光地理学研究の歴史は決して長いとは言えないが、その割には、比較的多様な研究が見られる。

韓国におけるこれまでの観光地理学の研究動向を論じたものとしては、李(1990)及び権・金(1994)がある。李(1990)は韓国における観光地理学研究の動向を、欧米及び日本の研究動向と比較した。また、権・金(1994)は、韓国における観光地理学研究を、観光資源に重点を置いたもの、人間の観光活動に重点を置いたもの、観光開発に重点を置いたものの3種類に分類した。

本稿でも権・金(1994)と同様に、これまでの觀

光地理学研究を、観光資源、観光活動、観光開発のいずれに重点を置いているかによって分類する。しかし実際には、観光資源と観光活動、あるいは観光資源と観光開発というように、一つの論文が複数のテーマを扱う場合も少なくない。そこで本稿では、基本的には上記の3分類に基づきながらも、論文で扱われている内容に従って、例えば、観光資源及び観光活動を扱った研究というように、やや細かく分類する。

III 韓国における観光地理学研究の動向

1. 観光資源を扱った研究

観光資源を扱った研究には、特定の観光地における観光資源全般について具体的に扱ったもの

と、主に全国を対象として、観光資源の分類及び空間的分布を扱ったものとがある。特に後者は、権・金(1994)も述べているように、韓国の観光地理学研究の中で大きなウェイトを占めている。

特定の観光地における観光資源全般を扱った研究には、慶尚北道(キョンサンブット)の周王(ジュワン)山における山岳地形の形成を扱った高(1986)、韓国的主要な温泉の特徴を示した権(1989)、釜山(プサン)の海雲台(ヘウンデ)海水浴場を扱った黄(1989a)などがある。なお、黄(1989a)は海雲台における主要な観光資源89項目の価値評価に関するアンケートを、同地を訪れる観光客に対して実施している。

観光資源の分類及び空間的分布を扱った研究の代表としては、黄(1987)が挙げられる。この研究は観光資源を自然景観、文化財、地方特産物などの6種類に分類した。さらに各観光資源の分布とともに全国の市町村について因子分析を行い、韓国的主要観光地の地域的特徴のかなりの部分を主に社会的・文化的資源の分布によって説明できることを示した。

また、論題が観光資源の分類及び空間的分布であっても、観光資源は観光開発行為の対象であり、人間の方からより積極的に働きかけるべきであるとの視点をも意識した新しいタイプの研究も見られる。例えば郭・李(1988)は、慶尚南道(キョンサンナムド)・慶尚北道の主要観光地における観光資源の分布を検討し、さらに交通条件なども加味して各観光地に対する価値評価を行い、価値評価の高いものほど開発を優先すべきであると主張している。

2. 観光資源及び観光活動を扱った研究

このタイプの研究は、具体的な観光地を取り上げ、いかなる観光資源が存在するのかを具体的に記述した上で、観光客の属性、季節別の来客数といった観光活動の具体的な内容にも触れている。観光活動に関する資料は、アンケートによって入手したものがほとんどである。

主なものとしては、蔚陵島(ウルルンド)を扱った鄭・秦(1989)、全羅南道(ジョンラナムド)の華嚴寺(ファオンサ)を扱ったキム(1986)、忠清北道(チョンチョンブット)の水安堡(スアンボ)

温泉を扱った金聖姫(1986)及び金(1989)、京畿道(キョンギド)と江原道(カンウォンド)の境界付近の清平湖(チョンピョンホ)を扱った金美京(1986)などの研究がある。

林・梁(1989)は、内容構成上は以上に挙げたものと大差はないが、韓国民族村をはじめとする首都ソウル近辺の娛樂施設を対象とした観光活動を扱っている。これまでの韓国の観光地理学研究は山岳地帯、離島など、韓国国内では人口密度の低い地域を対象としたものが多い。しかし、韓国では、南(1988)も指摘しているように、高度経済成長とともに都市人口が急速に増加し、今後も増加が見込まれるので、このように都市近郊、あるいは大都市における観光活動を扱った研究は、韓国の観光地理学において今後の発展が期待される分野であると考えられる。

3. 観光活動を扱った研究

観光活動を扱った研究は、大きく二つのタイプに分類される。一つは特定の観光地における観光活動について、観光客の属性、訪問目的、利用する交通手段などを具体的に検討したものであり、主に今後の観光開発のための参考資料を入手する目的で行われた研究が多い。たとえば、全羅南道を扱った張・李(1986)、全国の主要観光地における季節別の観光客数を調査した金(1987)などがある。

もう一つは、都市住民の観光活動、あるいは様々な観光地に対する意識構造を検討したものである。これはメンタルマップに代表される、欧米における認知・行動地理学的研究の影響を受けたものである。

たとえば、丁(1989)、金・鄭(1986)、韓(1990)、尹(1988)などがある。丁(1989)は大田(テジョン)市の住民の日帰り観光活動について具体的に検討した。金・鄭(1986)は、大邱(テグ)市内の住民及び大邱市郊外の住民の観光活動について、回数、旅費などの観点から比較した。韓(1990)はソウル市民を対象に、主要温泉の訪問目的を調査した。

尹(1988)もソウル市民を対象にして、全国の国立公園に関する認知と選好との関係を調査し、諸条件が優れていると認知されている国立公園でも、その人気は必ずしも高くないという結果を得

た。これは尹自身も指摘しているように、韓国の観光地では自然景観に比べて施設の充実があまり重視されていないことを反映していると考えられる。

4. 観光資源及び観光開発を扱った研究

このタイプの研究は、研究対象地域における観光資源の分布を具体的に記述した後で、今後の観光開発の方向を検討する構成をとっている。

主なものとしては、江原道を扱った金ほか(1990)、慶尚北道を扱ったウン・イ(1989)、全羅南道の東南部を扱った李ほか(1990)などがある。

5. 観光開発を扱った研究

観光開発を扱った研究は、観光施設や特産物を取り上げたもの、新たな観光資源の開発の可能性を述べたもの、そして観光地における地域住民の観光開発への取り組みを扱ったものに大別される。

観光施設や特産物の開発を扱った研究としては、江華島(ガンファド)を取り上げた方・張(1988)や全羅南道の光陽(クァンヤン)郡を扱った李(1989)が挙げられる。新たな観光資源の開発の可能性を述べたものには、海岸、河川、湖沼といった水資源を保有する空間について考察した黄(1989b)などがある。地域住民の観光開発への取り組みを扱ったものには、呉・任(1986)などがある。

観光開発を扱った研究は、積極的な観光開発を主張したものが大部分を占めている。その理由の一つとして、これらの研究が江原道や済州道(ジェジュド)のように、観光が地域経済において重要な地位を占めている地域を扱ったものが多いことが考えられる。しかし一方、少数ではあるが、観光開発がソウルなどの外部資本によって行われるために地域住民に対する経済効果があまり大きくないことを批判し、観光開発のあり方について根本的な問題を指摘した金(1990)のような研究も見られる。

今後の展望

韓国では主に1970年代以降、高度経済成長によ

る所得水準の向上や、高速道路網などの発達を背景にして、観光が急速に普及し、国民生活に定着するに至った。これとほぼ時を同じくして、観光地理学の研究も発展してきた。

韓国における観光地理学研究は、観光資源、観光活動、観光開発という3つのテーマを軸に展開した。中でも観光資源の分類及び空間的分布や、観光開発などを扱ったものが多い。これは、韓国においては観光が国民生活の間に定着した時期が新しいこと、また、観光が全国の資源開発という政府の政策目標と密接に結び付いてきたためと考えられ、政府主導のもとに急速な経済成長を遂げてきた新興工業国である韓国の国情をよく反映していると言える。

しかしその一方で、李(1990)も指摘しているように、これまでの研究は個々の事例研究に留まっているものが多く、観光地に関する理論の構築を試みているもののが少ないという問題点もある。今後の観光地理学の研究においては、観光地という空間を意識した理論的研究がより重要になると考えられる。

また、研究対象地域についても、筆者がIIIの2で指摘したように、韓国における都市人口の増加を反映して、都市近郊、あるいは大都市における観光活動を扱った研究の増加が期待される。

注

- 1) 国立公園は第1図にあるように、現在までに20箇所が指定されている。
- 2) 5大観光圏とは、全国を中部観光圏(京畿道及び江原道)、忠清観光圏(忠清南北道)、西南観光圏(全羅南北道)、東南観光圏(慶尚南北道)、済州観光圏(済州道)の五つに区分したものであり、さらにこの下に24個の小観光圏がある。

文 献

- すべて韓国語文献であり、論文のタイトルは、筆者が原文の表現を尊重しつつ日本語に翻訳したものを示した。文献の配列は、韓国の学術誌における一般的な方式による。
- 高義長(1986)：国立公園周王山の自然景観分析。世宗大学論文集、13、人文・社会分野編、89-115。
- 郭詰弘・李承炯(1988)：嶺南地方観光地の価値評価に関する研究。慶尚大学校論文集、27、297-306。
- 権承愛(1989)：わが国の温泉の観光地理学的考察。緑友会

- 報, 31, 15-42.
- 權容友・金善姬(1994) : 観光資源に対する地理学的研究動向. 大韓地理学会誌, 29, 202-245.
- 金科哲(1990) : 観光地開発の経済的波及効果分析—白岩温泉を事例に一. 地理学論叢, 17, 41-58.
- 金美京(1986) : 清平湖畔の観光地理的考察. 江原地理, 4, 16-23.
- 金炳文(1987) : 韓国観光地における季節別の旅客数の多少に関する研究. 地理学研究, 12, 35-67.
- 金炳文(1989) : 水安堡温泉観光産業の活性化方案に関する研究. 社会科学研究, 29, 104-143.
- 金炳文・丁碩重・朴浩杓(1990) : 江原地域観光: レジャー資源開発方案と活性化に関する研究. 社会科学研究, 30, 54-102.
- 金聖姫(1986) : 水安堡温泉の観光地理学的研究. 高麗大学校教育大学院地理教育専攻 修士論文, 77p.
- 金正憲・鄭承鑑(1986) : 大邱市隣接地域住民の観光行態—大邱隣接地域を事例に一. 地理学叢, 14, 36-43.
- キムニヘラン(1986) : 観光地華嚴寺の夏季観光客分析, 無等地理, 4, 47-63.
- 南榮佑(1988) : 『都市と国土』 法文社, 347p.
- 方敬美・張誠允(1988) : 江華地域の経済地理学的考察—観光部分を中心の一. 誠信地理, 5, 45-61.
- 吳南三・任乙化(1986) : 観光客誘致環境の助成と濟州島民の参与に対する一考察. 観光開発研究論文集, 3, 93-119.
- 尹吉鎮(1988) : 観光地の選好と認知に関する研究—国立公園を中心に一. 地理学, 37, 87-98.
- ユンニウンス・イサンファン(1989) : 慶尚北道地域の観光資源分布類型とその開発戦略に関する研究. 誠信地理, 6, 51-68.
- 李楨九・李聖雄・朴魯東・朱石中・李楨錄(1990) : 全南東南圏における観光拠点団地の開発の妥当性に関する研究. 地域開発研究, 22, 159-210.
- 李楨錄(1989) : 光陽圏における社会福祉と観光部門の開発構想. 地域開発研究, 21, 265-278.
- 李厚錫(1990) : 観光地域に対する地理学的研究動向と課題. 東国地理, 11, 29-39.
- 林漢洙・梁美子(1986) : 竜仁地域の観光資源分布類型と観光行態に関する研究. 応用地理, 9, 1-38.
- 張保雄・李楨錄(1986) : 全南地域観光客の行態及び需要分析—春・秋季観光客を中心に一. 全南大論文集, 30, 145-171.
- 鄭承鎰・秦錫泰(1989) : 島嶼観光地としての蔚陵島. 地理学叢: 17, 31-42.
- 丁源一(1989) : 大田市における家族単位の日帰り観光行動. 地理学叢, 17, 70-82.
- 韓炳善(1990) : 温泉観光地に対する選好行態と類型分類に関する研究. 中央地理, 5, 1-68.
- 黃昌潤(1987) : わが国の観光資源の空間分布に関する研究. 釜山女子大学論文集, 23, 183-205.
- 黃昌潤(1989a) : 海雲台観光資源の構造的特性に関する研究. 観光・レジャー研究, 1, 113-128.
- 黃昌潤(1989b) : 観光レクリエーション資源としての水資源の開発利用に関する小考察. 釜山女子大学論文集, 27, 281-294.